

言えなかつた

ありがとう

小六

これは、私が小学一年生のころの話です。そのころ母は、A園という老人ホームでヘルパーとして働いていました。私も時々母の仕事場へ見学にいらしていました。母を待っている間に読むための本を持っていくこともありました。

ある日、いつも私がすわっているソファに二人のおばあさんがすわっていました。私はそのとなりにすわって本を読みました。すると、「その本、何ていう本なの？」

と聞かれました。

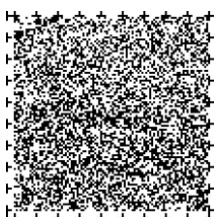
「スローロリスという本です。スローロリスという種類のリスがとってもかわいいんです。」

「そう。読んでみてくれる？」

「はい。」

そう言つて、私はスローロリスを読みました。二人は、笑顔で聞いてくださいました。私も、いつの間にか笑つて学校や友達、家族のことなどの話をしていました。そのころの私は学校で友達に仲間外れにされたり、いじめられたりしていたので、久しぶりに心から笑えた気がしました。

また何日かして、母に連れられて老人ホームへ行きました。母と一緒に部屋を回りました。



最後の部屋へ行くとおじいさんがベッドにすわっていました。しばらく話をした後、おじいさんが

「待って。」

と、私を呼び止め、私の手に何かを入れました。

「お守りだよ。」

手を開けてみると、そこにはピンク色でボールの形をしていて中にすずが入っているビーズの小物がありました。

私は思わず、

「かわいい。」

と言いました。すると、おじいさんは照れくさそうに、

「手作りなんだよね。」

と言いました。手作りでこんなかわいいものが作れるなんてすごいなと思

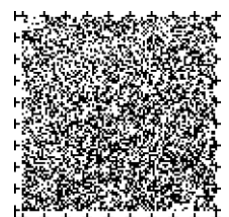
ました。

「ありがとうございます。」

おじいさんに軽く頭を下げて

部屋を出ました。

クリスマスが近づいたある日、この日も母と一緒に老人ホームへ行きました。きれいなクリスマス飾りをながめていると、ヘルパーさんが押す車いすに乗って、Bさんがこちらに来ました。Bさんは、脳や筋肉に障害があり、言葉もあまり話すことができず、手がいとも震えていて、よだれがたれてしまうので、いつもよだれかけをしています。私に向かって何か言っているようでしたが、よくわからなくてちよつと怖いと思ってしまいました。下を見ると百



円が落ちていました。Bさんはふるえる手で一生けん命に百円をつかもうとしていました。つかめずにヘルパーさんに拾ってもらいました。そして、ずっとゆれている腕で私にその百円を差し出してくださいました。

「あげるって、その百円。自動販売機で飲み物でも買っておいで。」

とヘルパーさんが言って、Bさんと行ってしまいました。私はその時、ありがとうございますとも言えず、そのまま立ちすくんでいました。

その後、母は老人ホームの仕事をやめ、Bさん達に会うこともできなくなりました。

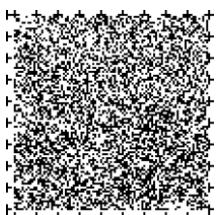
今になって私はとても後悔しています。Bさんの事が怖くてさけてしまっ

たことはもちろんですが、何よりも、震える手で一生けん命百円をくださったのに、ありがとうの一言も言えなかつたことが一番悔しいです。

あれから五年がたち、Bさんはどうしているかわかりません。そう思うと胸が苦しくしめつけられます。でも、私は今になってこう思います。

「人はみんな同じ優しい心をもっています。病気や事故で障害が残ってしまった姿になっても、そんな事は関係なく、外見で差別したり、怖がったりすることなく接したいです。もしも、助けを求めているのならば、自分から助けに行きたいです。」と。

小さな私に笑顔でふるまい、たくさんの思い出を作ってく



ださった老人ホームのみなさん、  
ありがとうございました。

